

## 2022年度事業報告（案）

（2022年1月1日～12月31日）

法人名称 NPO 法人 教育支援グループ Ed.ベンチャー

### 1. 事業成果

コロナ禍によって直面することになった様々な「不都合な事実」に対して、教育支援を目的とするNPO法人として「異議」を唱え「提起」する責任を標榜して、2022年度は事業に取り組んだ。特に注目したのは「女性の生きづらさ」である。

成果の一つは、「女性の生きづらさ」に関わるテーマを、それぞれの事業で取り上げ、この問題を重層的に学んだことである。事業を串刺す共通テーマを設けることで、学びを広げることを試みた。特に授業研究会では、この課題を正面に取り上げて取り組んだ。その中では新たな課題も浮上することになった。それは、問題が整理され理解されても現実は簡単には変わらないということである。

現実の変化に向けて、私たちは何をすればいいのか。そこで取り組まれたのが、今の状況を語ること、学びで得られた言葉で現在の状況を語ること、といった試みである。「女性の生きづらさ」に関しては、普及啓発事業で教育講演会の開催に向けて、参加者それぞれが経験してきた「女性の生きづらさ」が語られる場が設けられた。そうした場では、互いの語りが自らの経験の振り返りを促し、それによって自らの経験に厚みを増すことにつながる場となっていました。こうした語りから「男性の加害性」が男性の位置取りにあるものから語られることになったことも大きな成果である。こうした語る場づくりは、外国人の子どもも支援での事例研究や、「学校が捨てられる・先生が捨てられる」をテーマとした理論学習会、インクルーシブな社会を目指す学習会でもしばしば行われることとなった。

このように、2022年度標榜された「異議」を唱え「提起」する責任への向き合い方への答えは、私たち個々人がおかれた場所で現実を語りなおすことを通じて果たされていくという一つの方向性を見出すことになったのである。

2022年度はNPO発足15周年を迎えたわけであるが、これを機に、15年間の教育講演会を中心とした学びをまとめた講演録がまとめられて一つの節目を迎える。ここからは、自らを語り社会変革を目指すステージに向かって進む予感を感じる1年となった。

## 2. 事業内容

### 学校支援事業 ①理論学習会

#### 【2022年事業目標】

教育現場の状況を討論の中で分析し、客観視することで、今後のあるべき方向性を模索する。

#### 【事業総括】

今年度の理論学習会は、外部からの整理された知識や知見ではなく、互いの言葉を積み重ね、編み上げていくことが必要であると考え、参加者で議論することを重視した学習会を開催した。学校現場にいる者たちが、子ども達や保護者、教職員相互の小さな声を聞き、現実の裏にある「事実」を整理することが必要であると考えたためである。

今年度、「学校が捨てられる・先生が捨てられる」をテーマに置いて、教育現場で考えるべき課題に焦点をあて、学習会を実施した。

はじめに、社会的・歴史的背景から見たとき、教育がどのような意味を持って行われてきたか、経済を中心とする社会に動かされた教育の歴史についてそれぞれの考えを語り合った。その中で、学習と評価をキーワードに、今の学校が目指しているものを整理することを試みた。教師が目指す「学び」とは何か、身に付けさせるべきことは何かを考えた。

また、教室という集団をどう捉えるかについて議論した学習会では、教師が「水平化・画一化」「親和性」を求めつつも、「格差」「競争」が引き起こされている教育現場の矛盾の中に置かれている子ども達の現状を整理することができた。その矛盾から見えてきたことは、教員自身も教員集団の中での「競争」により、追い込まれている状況があるということだった。

「女性の生きづらさ」を考える学習会では、「学校が求める家族像」とからめ、学校で期待している家族の姿を議題とした。家事はもちろん、宿題をみることまでも当たり前に要求され、出来なければ母親が責められる現状は、学校が求める家族像を追求することで、女性の生きづらさをさらに深刻にさせていたということだった。

子ども達の「将来」に焦点をあててテーマを設定した学習会では、急速に変化する社会情勢の中で今の子どもたちに必要な力は何か、どんな力をつけさせるべきかなど、教員が果たすべき役割について話し合いがなされた。現代のこの不安な時代で苦しんでいる子ども達の未来に必要な力についてはまだ整理できず、議論が足りないと感じたが、「多様な考え方と触れる力」「型を破る力」「想像力」など様々な意見が交わされ、それぞれの課題を見つめ直す機会となった。

今年度最後の学習会では、「自分なり」に具体的に学校を改革してみることを考えた。自身の感じている学校現場での課題を自分事として捉え、自分にできる事を見つけ、一步前に進む実践を積み重ねていくために対話した。

今年度のテーマにある「学校が捨てられる」という言葉は、急速に変化する日本社会の状況、広がる格差、様々な教育的な課題がある中、学校や教員が必要とされていない、役割を持たない現状があることを予告している。参加者で互いの言葉を積み重ねることで、

「捨てられる」という「事実」を整理するには課題が多く、教育現場での改革、実践を紡いでいくことが必要であることを再認識することとなった。

また、今年度の開催方法として、参加者で話し合いをすることを重視し、対面での参加を重視した。これまでの理論学習会では、講師を招き、知識を獲得することを重点に置いたが、互いの考えを語り合うことに大きな意味があった。一人ひとり実践する場が違っていても、同じ考え方を持つ仲間がいる、そういうつながりを感じ、互いを支え合える場となった。

また、対面を重視しながらも、オンラインと同時展開することで参加しやすい状況を開いた。オンライン開催をすることで、離れた場所にいる仲間とのつながりも期待できる。来年度の活動にも活かしていきたい。

担当者	<p>●活動代表（理事）馬場有希 清水美希 村本綾            ○スタッフ 根岸澪</p>
内容・日時・場所・参加者数	<p>偶数月末に全5回開催(4月、6月、8月、10月、12月)            場所 大和市シリウス&amp;オンライン（Zoom）同時開催            4月29日（金）13:00～15:00            ☆「学習」「評価」から、今の学校教育が目指しているものを整理する            場所 大和市シリウス 609&amp;オンライン（Zoom）同時開催            参加者 11名            6月29日（水）19:00～21:00            ☆教室の親和性と競争原理が意味するもの            場所 大和市シリウス 610&amp;オンライン（Zoom）同時開催            参加者 7名            8月27日（土）13:00～15:00            ☆学校が求める「家族像」の問題性・・女性の生きづらさの視点から            場所 大和市シリウス 610&amp;オンライン（Zoom）同時開催            参加者 8名            10月26日（木）19:00～21:00            ☆現在の子ども達に、私たちが獲得を目指さなければいけない「力」は何か            場所 大和市シリウス 609&amp;オンライン（Zoom）同時開催            参加者 9名            12月17日（土）13:00～15:00            ☆自分なりに学校を具体的に改革してみる（なぜ学校や先生は捨てられそうになっているのか）            場所 大和市シリウス 603&amp;オンライン（Zoom）同時開催            参加者 9名</p>

(のべ参加者数 44名)

収入金額	17,200円（寄付金）
支出金額	5,800円（賃借料 5,800円）

## 学校支援事業 ②授業研究会

### 【2022年事業目標】

今日的な課題を教材化する。

### 【事業総括】

今年度は、全体として「女性の生きづらさ」をテーマの中心に置くことになったので、女性問題に関わる課題に焦点を当て授業研究することにした。女性が一人の人間として、生きていきたいと思う時、そこに立ちはだかるジェンダーバイアスがある。生育過程、教育過程を通じてである。さらに、女性が経済的自立をしようとした時にも様々な問題がある。

そこで、女性が自分らしく生きたいと思うことをさまたげている社会のあり方を教育現場でどう探求していくのかを考え、カリキュラムづくりのヒントを得ることにした。

第1回は、『性別があふれる学校は変われるのか』寺町晋哉著『中等教育におけるジェンダー平等の過去、現在、未来』木村涼子著を使って学習した。保育園の課題として「性別の認識」があるが、それは必要なのか、学校教育の中では、無意識のうちに「男女」を区別しているところがまだ多い、第2次成長を扱うときに、トランスジェンダーのことも扱うべきではないかなどが話された。

第2回は、それらを受けて「ジェンダーのカリキュラム化」をテーマに話し合った。初めて参加してくださった中学校の先生から「思春期」の扱い方の大切さが指摘された。また、先生方のほうが生徒より「ジェンダー」に鈍感である場合が多いので、教師がきちんと勉強すべきであることも話された。

第3回は「女性の働き方」について学習した。その中で北欧諸国の取り組み方は、日本と根本から違っていて、「人権」を基本に据えているか否かの違いなのではないかと言う意見が出された。「非正規労働者」が圧倒的に増えている特に女性が多いのは、「家事」「育児」が家庭の労働として今も女性が中心に担うべきであるという考え方方が変わってないことに起因しているのではないか。育児休業制度の男子の取得率を上げていかなくてはならない。いろいろなサポート機関はできてきているが、お金がかかりすぎるため利用できない人が多い。制度があっても一番必要な人に届いていないなど様々な問題が山積していることがわかった。

第4回は「女性の働き方についてのカリキュラムづくり」について話し合った。カリキュラムの内容について①女性の経済的自立の必要性②働く女性を取り巻く現状問題③様々な制度について④根本的な問題を軸に展開する提案が出された後フリートークングした。根本的な問題の「育児に母性は必要か」については、最近の研究成果として「母性神話」は、崩れてきているという話が紹介された。

内容的には、後期中等教育での課題かもしれないが、「人権尊重」という根本から見つ

め直すならば、初等教育の段階からでも授業化する意味があると話された。しかし、学校で学んだ事と現実社会に出た時のギャップが大きすぎる事が指摘された。それについては、「学びの段階で常に現実社会に着目させる視点が必要」さらに、「理念と実際が乖離していたならば、どうすれば実現できるかを考え合う場面の設定が必要」「教師自身が、人権感覚を磨き、身近な声を拾っていけるようにならなければいけないのではないか」という意見が出た。コロナ禍で人との距離が離れすぎてしまっている事が、益々身近な声を感じにくくさせているということも出され、ICTをうまく使いこなすことの重要性にも触れる学習会になった。

ジェンダーバイアスの問題、女性の働き方に関わる問題を教材化する試みであったが、それなりにヒントを得られる学習会になった。中学校の現場の先生の発言から中学生の実態に触れられたのは良かった。しかし、現在、子どもたちを前にして日常的に指導している若手の教師たちの参加が全くと言っていいほどなかったのは残念であった。

この授業研究会が、現場の先生方のニーズに適合していないのかもしれない。来年度も継続するのは、難しいと思う。

担当者	<input checked="" type="radio"/> 活動代表（理事）内藤順子 <input type="radio"/> （スタッフ）下新原なつみ
内容・日時・場所・ 参加者数	<p>第1回 5月16日（月） 20:00～22:00          ジェンダーについての現状認識のための学習会          オンライン（Zoom） 参加者 5名</p> <p>第2回 7月25日（月） 20:00～22:00          ジェンダーについてのカリキュラムづくり          オンライン（Zoom） 参加者 3名</p> <p>第3回 8月15日（月） 20:00～22:00          女性の働き方についての学習会          オンライン（Zoom） 参加者 4名</p> <p>第4回 11月21日（月） 20:00～22:00          女性の働き方についてのカリキュラムづくり          オンライン（Zoom） 参加者 4名</p> <p style="text-align: right;">（のべ参加者数 16 名）</p>
収入金額	0円
支出金額	0円

## 学校支援事業 ③スタディツアー

### 【2022年事業目標】

虐待についてや、支援が必要な子ども・保護者に関する講演会・事例研究会を通して、知識や対処の仕方を学び、様々なケースに対応できる力を身につける。

### 【事業総括】

今年度は、「支援が必要な子ども・保護者への対応」というテーマで、全4回の学習会を行った。

第1回は、スクールソーシャルワーカーを講師に迎え、虐待対応に関する講演会を行った。虐待が疑われる場面での判断基準、実際の通告時の対応の進め方について、学ぶことができた。一方で、参加した教員からは、該当児童・生徒の担任が中心となり対応に当たるケースが多く、負担が集中してしまうなど、校内の体制整備の部分で課題が明らかになった。また、講師からは、学校や関係機関と家庭側で窓口になるのは、母親となっている場合が多く、母親に対する支援も重要であると話があった。

第2回の事例研究会では、祖父からの身体的虐待を受ける生徒の事例を扱った。担任は家庭連絡を母親と行っていたが、義父である祖父との間に立ち、学校や関係機関との対応に一人あたる母親の大変さが浮き彫りとなった。

第3回は、学校・教員が関わることが難しいと感じる保護者が抱える生きづらさに焦点をあて、境界性パーソナリティに関する講演会を行った。その特徴や特徴を踏まえて関わる際に意識することなどについて、小学生の母親の事例を基にして学んだ。

第4回の事例研究会では、発達障害の傾向がある児童の家庭で、母親が育児・家事に関わらず、父親が児童の世話を見ており、父親の疲弊が心配されるという事例だった。児童への対応や、父親への支援が検討されたが、そもそも母親と父親が逆であった場合、事例として取り上げられるのかという意見が出た。

### ●4回の学習会を経て、次の2点を総括として挙げる。

- ・虐待に関する制度や手順、様々な保護者との関わりにおける特性の理解など、事案についての知識が教員や対応者の間で共有されることが必要である。その共有を前提として、担任や児童・生徒支援担当だけが対応に当たるのではなく、学年や学校全体で役割分担をした体制づくりが求められる。
- ・事例研究会から明らかになった、多くの学校・教員が潜在的に持つ「子どもに関することを家庭内で担うのは母親」という認識を改めること。実際に起きている事案の解消だけに意識が向いてしまうと、母親を苦しめている場合があることを忘れてはならない。

○2年間、新型コロナウィルス感染拡大の影響で、現地への訪問ではなく、オンラインでの学習会を開催してきた。現状を踏まえると、来年度のツアー開催も難しいため、一度活動を休止する。現地を訪れ、学習する機会は有意義であるので、ツアー開催が可能な状況になれば、活動を再開したい。

担当者	●活動代表（理事） 池田喬
-----	---------------

内容・日時・場所 参加者数	<b>第1回学習会</b> 5月21日(土) 14:30~16:00 オンライン(Zoom) 講演「虐待通告、そしてその後の子ども・家族との関わりにおいて教員・学校が考えること」 講師：上原樹氏（スクールソーシャルワーカー） 参加者 10名
	<b>第2回学習会 事例研究会</b> 6月18日(土) 14:30~16:00 オンライン(Zoom) 参加者 2名
	<b>第3回学習会</b> 9月3日(土) 14:30~16:00 オンライン(Zoom) 講演「保護者が抱える生きづらさと向き合う」 講師：杉田真也氏（臨床心理士・公認心理師） 参加者 5名
	<b>第4回学習会 事例研究会</b> 10月29日(土) 13:30~15:00 オンライン(Zoom) 参加者 4名
(のべ参加者数 21 名)	
収入金額	0円
支出金額	0円

## 学校支援事業 ④産休・育休・働くママパパのための学習会

### 【2022年事業目標】

2022年度は活動休止

### 【事業総括】

今年度は、育児中の方の学習の場が確保されていたため、本活動を休止した。

本事業は、育児中の方が安心して学習することができるような学習会の場を提供することを目標に2016年に発足した。

発足当時、Ed.ベンチャーの学習会は、開催時間や場所の関係で、子連れでは参加が難しく、育児中の方が学習する機会を諦める状況が見られた。しかし、いくつかの変化を経て学習会の形も大きく様変わりしてきた。

社会全体に急速にオンラインが浸透したことは大きな変化の一つである。Ed.ベンチャーでもオンラインでの学習会、講演会が定着し、育児中の方も参加しやすい環境になっ

た。また、子育て中の方へも意識を向けた事業展開がされるようになったことも一つの変化であると言える。開催曜日や時間を工夫することで、時間的な制約で参加できなかつた方が前向きに参加するきっかけになっている。

以上のことと踏まえ、Ed.ベンチャーの各学習会において、育児中の方の学習の場が確保されているため本事業は役割を終えたとし、一旦活動を終了する。しかし、今後、コロナが終息することで対面での学習会に戻り、再び育児中の方の学習の場の確保が難しくなるようなことがあれば、新たな問題解決に合わせた事業として開始する可能性もある。今後の動向を注視していきたい。

担当者	●活動代表（理事）下新原なつみ ○スタッフ 清水美紀
内容・日時・場所・ 参加者数	(のべ参加者数 名)
収入金額	0 円
支出金額	0 円

## 学校支援事業 ⑤外国人の子ども理解のための学習会

### 【2022年事業目標】

外国人の子どもの現状や課題を理解する場、外国人の子どもに関する専門的な知識を学ぶ場を企画運営する。

### 【事業総括】

#### ① 学習会

4月は「国際教室を運営してみて」をテーマに国際教室を担当した経験のある柳川実穂小学校教諭と藤木仁美中学校教諭、計2名の経験をもとに学習会を行った。柳川先生からは、「よりよい国際教室にするために1年で何か残そう」をもとに取り組んだ実践を紹介してもらった。児童の様子を観察する中で、コミュニケーションが取れないのか、日本語がわからないのか、母語ならわかるのか、緊張しているのか、友達と関わりを持ちたいのかなど、何に困っているのかを把握する。話すのは好きだけれど書く練習は苦手な場合は、話したことを見たり、物語を作ったりする。熟語になると漢字が読めない場合は国語辞典や絵カード、教科書を丁寧に読んだりして語彙を増やす。同じ学年の友達や同程度の日本語レベルの児童と一緒に個別学習することでコミュニケーションを取りやすくするなど、その児童の状況に合わせた工夫をして指導をしていた。それに加えて大切にしていたのが担任とのつながりで、全体指導でおいていけぼりになっていたとしても、クラスで自信がなかったとしても、担任と国際教室での取り組みを共有してその児童なりの参加の仕方を模索していくことの大切さを伝えていた。

藤木先生は、中学校でクラス担任も持ちながら国際教室の担任でもあるという立場で国際教室を立ち上げた。市内でも国際教室の開設は形式がなく、担任裁量であり、市からは「国際教室からクラスに戻ることがゴール」と要求されながらも国際教室での支援は授

業に遅れが生じるという矛盾を感じていた。そんな要求はさておき、どういう経緯で日本で暮らしているのか、他愛のない会話をしたりお悩み相談したりする時間を個別学習しながら大切にしていた。また、中学校では成績が進路に直結していき、国際教室に通い続けることが授業の遅れにつながる葛藤を抱えたり、在県枠で受験するときの窓口は国際教室担当？（担任や進路担当が把握するべきでは？）と無責任さを感じたりしながら、競争原理が強く働く中で大切にしたいことは何かをいつも確かめていた。

二人とも共通していたのは、若くして積極的に国際教室を担当し、児童・生徒の居場所や成長の場になるように努力していること、国際教室にいる児童・生徒のことをもっと理解してもらうために学級担任や学校全体に発信し続けたことである。今後もよりよい国際教室を模索するために様々な取り組みを取り上げていきたい。

8月は「外国人が抱える家族の葛藤—女性に焦点を当ててー」を扱った。特に不協和的文化変容にある家族（家庭での生活と学校での生活との間に言語や文化の不一致のある家族）の抱える課題は多い。家族の絆の崩壊、子どものエスニックコミュニティの放棄、子どもたちはセミリンガルもしくは日本語モノリンガルへと事態は進行していく。やがて家族はエスニックコミュニティからも孤立していく。

親の母語話者として長男もしくは長女が存在する場合、学校を休んで未熟ながら日本語話者として役所や病院などにかり出されたり、親の代わりにきょうだいの世話をしたりと、ヤングケアラーの要素を多く含んでいく。とりわけ、女性がその役割を担うことが多い。さらに国際結婚環境では、権力関係が固定化されやすく、第一言語が日本語でない母は、在留資格や社会的地位を理由に家族関係がこじれると「誰のおかげで日本にいられると思っているんだ」と脅迫されることも少なくない。

それでも子は母の文化や言語で多くの時間を育てられている。けれど父が家庭に戻れば父に合わせ、学校に行けば学校に合わせる、とても複雑な環境を行き来する。

学校は、日本語話者を好むので日本語を理解する父をキーパーソンとする。生徒指導が起きたりすると子育てを担当する母はさらに追い詰められ、家庭内の父の権力がさらに増す。グループディスカッションでは、「今まで学校内にきょうだいがいればその長男長女に伝えねばなんとかやってくれた。でもきょうだいが卒業した後、うまくいかなくなつた。頼れるきょうだいがいるのも大事だが、教師が楽をするのではなく、その子の背景を知り、育てることを見失ってはいけない。」「部活でも勉強でも離脱していきやすいのはヤングケアラーの状態にある生徒であり、かつ女子が多い。学校としての課題は、そういう状態の生徒を洗い出して整理し、情報を共有することをしていきたい。」「国立大学附属中に勤務しているが面白いのは帰国生の会があること。かれらは帰国子女で、中学校から日本の学校に戻ることになった。前にいた学校と文化が違い、戸惑うことも多いかれらが学校の休み時間に集まり、共有できる居場所である。学校の中では“言ってもわかつてくれない”と思うことが多いかもしれないが、同じような境遇をもつ生徒が集まれる居場所を作ることも必要ではないか？」など現場から見える課題が挙がった。とりわけ、外国人家族の女性の葛藤に向き合うことについて考えを深めることができた学習会となった。

## ② 事例研究会

主に小中学校の先生方に事例を提供してもらい、事例について協議をした。教師間の連

携、アイデンティティ、受け入れ体制、親子関係などの事例が紹介され、それぞれの課題について協議を行い、子どもの抱える困難やその背景などについて学習した。さらに、外国にルーツがある大学院生のライフヒストリーをもとにした研究報告を聞き、外国にルーツのある子どもの体験や葛藤をより詳しく知ることができた。今年度は、外国人の子どもの受け入れが話題となることが多く、担任や国際教室担当といった個人の努力だけではなく、学校全体の受け入れ態勢を整える必要性や多様性に開かれた学校について考えることが多かった。アドバイザーの先生からは、それぞのテーマについて専門的な知識をお話しいただくとともに、学校現場ですぐに実践できる具体的な取り組み例もアドバイスいただき、有意義な研究会となった。参加者は、学校で子どもの学習を支援する立場の方や地域の子どもの活動を支援している方など、教員以外の方の参加が多くなってきた。

尚、開催は水曜開催と土曜開催を計画していたが、曜日を変更して開催することとなり、水曜と土曜開催の回数が均等にならなかつたりしたことが反省として残った。

担当者	<input checked="" type="radio"/> 活動代表（理事）西岡歩 <input type="radio"/> スタッフ 篠原弘美
内容・日時・場所・ 参加者数	<p>① 学習会</p> <p>4月 21日（木） 19：00～21：00            国際教室を運営してみて            講師：柳川実穂氏（大和市立小学校教諭）            藤木仁美氏（座間市立中学校教諭）            大和市シリウス 612 及びオンライン（Zoom）            参加者：会場 7名 オンライン 10名 計 17名</p> <p>8月 5日（金） 13：30～16：00            外国人が抱える家族の葛藤—女性に焦点を当てて一            講師：清水睦美氏（日本女子大学教授）            大和市シリウス 612 及びオンライン（Zoom）            参加者：会場 12 名 オンライン 5 名 計 17 名</p> <p>② 事例研究会</p> <p>2/28 3/30 5/24 6/27 7/22 10/12 19：00～21：00            オンライン（Zoom） のべ参加者数 58名</p> <p>1/29 9/24 11/26 13：30～15：30            オンライン（Zoom） のべ参加者数 15名</p> <p style="text-align: right;">（のべ参加者数 107名）</p>
収入金額	10,500円（参加費 6,500円、寄付金 4,000円）
支出金額	24,695円（賃借料 4,400円、諸謝金 11,137円、印刷製本費 990円、通信運搬費 168円、消耗品費 8,000円）

## 学校支援事業 ⑥インクルーシブな社会を目指す学習会

### 【2022年事業目標】

学校現場でのインクルーシブな教育の実現の可能性を探る。

### 【事業総括】

今年度は事業目標の実現を目指し、2つの柱を立てて学習会を行った。1つ目は、インクルーシブに向かう営みとして、子どもたちのおかれた苦しさを理解すること。2つ目は、インクルーシブに向かう営みとして、学校や教室において子どもたちの多様性を認め受け止める環境づくりの可能性を探ることである。具体的には以下のとおりである。

#### ①子どもたちの抱える苦しさを理解すること

5月の学習会では、講師の米澤氏より、不登校の子どもやその保護者と接する中でみえた本人たち自身が感じている思い・実情について話を聞くことができた。

学校だけが子どもの唯一の成長の場ではないことを自覚し、学校・教師の立場から接するのではなく子ども・保護者両者との対話を進めていくこと。ゆっくり休んだ子どもたちは自分で立ち上がるということを信じる、不登校の子どもたち側に立ち接することが何より大切であると学ぶことができた。

また、家庭に目を向けると、不登校児に対する父親の理解が進まず母親が抱え込むばかりで、子どもの立ち直りが難しい家庭も多いとの話もあり、ここでも、子育てが“母親のしごと”として押し付けられているという現状がみられた。

10月は、「愛着障害」をテーマにいくつかの書籍をもとに、愛着障害とはなにかを知り、愛着障害とどのように向き合えばよいのかについて考えることができた。

愛着の欠如がどのような生きづらさを生み出すのか、そして、愛着の形成は決して幼児期に限定されるものではないと知ることができたことが大きな収穫であった。その上で、家庭を離れた教育現場や社会の中でできることを探し実現することが次の課題であると感じた。

11月の学習会では、児童養護施設出身者の声から社会の在り方を考える学習会となつた。講師の葛屋氏は、施設の子たちは、「自分が一般的な家庭で育っていない」というコンプレックスを抱えやすく、施設職員として当事者に近寄って行かない限りSOSを受け取ることはできない。退所後の方が苦しむことが多く、中でも孤独感が一番の問題と語っていた。

#### ②学校や教室でのインクルーシブな環境づくりについて

7・9月は、実際に中学校・小学校で行われた授業実践から“インクルーシブな授業”について深める学習会となつた。

中学校の授業についての意見交換では、教科の特性によって多様性を認めるインクルーシブな授業を展開しやすい教科とそうでないものがあり、学齢の高い学校こそ子どもたちは多様化しているという指摘があった。インクルーシブな授業・学校を目指すのであれば、教科外でのインクルーシブな取り組みが大切であると実感のもてる学習会となつた。

小学校2年生の「スイミー」を題材にした授業報告では、国語の音読や調べ学習での生き物調べ、図工では掲示物の作成をしていくなど、教科横断的な様々な教科でスイミーを深めながら、生き生きと学習する児童の姿を見ることができた。

月1回の個別面談で一人ひとりの児童を理解し、学習の習熟度という序列を無視した意図的なグルーピングや自分の好きな勉強をする自学時間の設定など。その授業の時間だけではない、日常のクラスづくりの延長上に、支援級・国際級の児童も同じ教室で学ぶことのできるクラスの雰囲気があると改めて考えさせられた。

また、綿密なカリキュラムマネジメントや授業の様子を見せあうことで生まれる職員間での連携の重要性にも注目が集った。相手を認め合う職員の関係性が、子ども同士の多様性を認める姿とも重なり、学年職員団がインクルーシブであることが子どもたちにいい影響をもたらすと感じることができた。

12月の学習会は、学校で生活する子どもの現状をどのように受け止めるのかが一つのテーマであった。アンケートや個別の面談など、子どもの現状を把握する手段はあるが、これまでにその子自身が本音を語ってきたという経験がなければ、決して本音を語らせることはできないという意見に考えさせられることが多かった。

子どもへの働きかけを絶やすことなく様々な方法で行いながら、その都度子どもの様子を気にかけ、“その子にあった”つながり方を模索していくこと。その行為こそが目の前の子どもに対する理解を深めることであり、多様性を認める大前提となる“個を大切にすること”であると感じた。

担当者	<input checked="" type="radio"/> 活動代表（理事）森尾宙 <input type="radio"/> スタッフ 清水睦美
内容・日時・場所・参加者数	<p>5月11日(水) 19:00～21:00 オンライン（Zoom）            内容：不登校の子ども理解            ～子ども自身とその母親の葛藤と実情を知る～            講師：米澤美法氏（NPO法人自由創造ラボたんぽぽ 代表理事）            参加者 8名</p> <p>7月6日(水) 19:00～21:00 オンライン（Zoom）            内容：インクルーシブな授業の提案①～中学校～            提案者：森尾宙氏（座間市立中学校教諭）            参加者 5名</p> <p>9月25日(日) 13:00～15:00 オンライン（Zoom）            内容：インクルーシブな授業の提案②～小学校～            提案者：馬場貴司氏（大和市立小学校教諭）            参加者 11名</p> <p>10月19日(水) 19:00～21:00 オンライン（Zoom）            内容：愛着障害について</p>

	<p>参加者 13名</p> <p>11月2日(水) 19:00~21:00 オンライン (Zoom)      内容：児童養護施設出身者の声      講師：児童養護施設 唐池学園職員      参加者 7名</p> <p>12月7日(水) 19:00~21:00 オンライン (Zoom)      事例研究：インクルーシブなクラスづくり      ~生徒の実感としてのインクルーシブ～      発表者：森尾宙氏（座間市立中学校教諭）      参加者 3名      (のべ参加者数 47名)</p>
収入金額	0円
支出金額	0円

## 外国人支援事業

### ⑦子どもの居場所・学習支援教室（エステレージャ☆ハッピー教室）

#### 【2022年事業目標】

外国にルーツのある子どもの居場所作りと学習支援を行う。学習だけではなく、家庭や学校の話を丁寧に聞いて可能な範囲で支援をしたり解決を図る。また、小中学生が共に体験したり学んだり話し合ったりすることを通して、異年齢の仲間と協力し、お互いの考えを知り自分の考えを深められるように、集団で学ぶ時間を設ける。

#### 〈小学生教室〉

学習や遊びを通じ子ども同士の関わりが深まるように促していく。教科学習支援として、宿題の他、国語・算数を中心に学年ごとの習得すべき内容の教材を用意して学習の支援を行う。学習内容の理解を深めていくように、丁寧な説明を加えながら学習を進めていく。

#### 〈中学生教室〉

中学生に対しても、丁寧な説明を加えながら学習を進め、学習内容の理解を深めていく。普段の学習支援の他、定期テストや高校受験の支援も行う。定期テスト前にはテスト対策の学習会を、中3生には受験対策学習会を準備する。また、2、3年生には進路学習会を実施し、先輩の経験から進路について学ぶ機会を持ち、早くから将来について計画を持てるような時間を作る。

#### 〈母語教室〉

子どもたちの母語の維持、獲得のために、母語話者スタッフあるいは外部講師による母

語教室を定期的に開催する。学習計画は母語話者スタッフあるいは外部講師と一緒に考えていく。

#### 【事業総括】

外国にルーツのある小中学生の居場所作りと学習支援を行った。学習支援だけでなく、各学期末に保護者会を開催して、保護者や子どもから家庭や学校の様子を聞いて可能な範囲で支援を行った。

また、集団学習（工作：三角形を使ってのデザイン/松ぼっくりでのクリスマスの飾り、英語：挨拶・自己紹介、国語：ことわざ・慣用句）を実施したことで、各子どもの個性が発揮されたり、英語が話せる楽しさを実感したり、自分が努力したことを話す機会ができたりして一定の成果が得られた。

遊びに関しては、登録制を採っていることで参加者が固定化されているためか、子どもたちの仲が深まり異年齢間でもよい関係が築かれつつある。

#### 〈小学生教室〉

教科学習支援としては、宿題の他、国語、算数を中心に理解できない箇所を丁寧に説明したり反復練習させたりして、理解を深めたり、定着させたりした。また、子ども同士で教えあう様子が見られ、学習を通して子ども同士の関係が深まっていることが確認された。

特に小学生は安全のために教室への送り迎えに保護者が付き添って来るので、保護者の都合で来室できないことがある場合には家まで迎えに行くこともあった。

#### 〈中学生教室〉

学習支援においては、基本に立ち返ったりしながら丁寧に説明するように心掛けた。普段の学習支援に加えて、定期テスト対策の学習会や受験対策学習会を開催した。受験対策学習会は、週1～2回平日の夕方に開催をし、受験勉強や面接練習に取り組み、受験に向かう姿勢を作るとともに、受験前の不安を取り除くことができた。進路学習会については、特別な学習の機会を設けることはできなかったが、普段の学習の中で高校生や大学生スタッフ自身の進路についての体験を聞いたりする機会が多くあり、中学生が進路について知る機会となった。

#### 〈母語教室〉

今期は全員が南米系の子ども達なので、スペイン語の母語話者の先生に来ていただき、月1回スペイン語教室を開催した。親との日常会話でスペイン語を話しても、読み書きの学習経験がほとんどないためよい機会であった。保護者も期待してくれている。

#### 〈スタッフの母語教室〉

タガログ語の母語話者の先生によるタガログ語の教室を月1回開催していたが、先生が帰国することになり7月以降は開催していない。内容は、通訳や翻訳ができるように、学校での面談で出てくるような話の内容をタガログ語にする練習をしていた。学習者にとって活躍の場を広げることができるよい機会が得られたのではないだろうか。

担当者	●活動代表（理事）馬場貴司 福島聖子 ○スタッフ 角替弘規 篠原弘美 保坂克洋 根岸佐織 横矢玄 井上哲夫 ジェマイマ・ルース・アゴコプラ 佐藤ひより 滝川舞
-----	---

	吉川智洋 奥山奈希沙 相模女子大学ボランティアサークル「ミント」
内容・日時・場所・ 参加者数	<p>開催日：1/8.15.22.29 2/5.12.19.26 3/5.12.19.26          4/2.9.16.23.30 5/7.14.21.28 6/4.11.18.25 7/2.9.16.23          8/6.20.27 9/3.10.17.24 10/1.8.15.22.29 11/5.12.19.26          12/3.10.17.24</p> <p>時間：10：30～12：30          定期テスト対策 6/22          受験対策学習会 1/20,28 2/3,10,15,16          開催場所：大和市林間小学校図工室、                            大和市ベテルギウス会議室1 会議室2 部室                            大和市シリウス 603</p> <p>(のべ参加者数 156名)</p>
収入金額	255,700円 (参加費 5,700円、県中央労福協共済金 250,000円)
支出金額	312,514円 (給与手当 108,332円、保険料 6,148円、賃借料 85,150円、諸謝金 33,410円、印刷製本費 3,650円、消耗品費 72,234円、旅費交通費 3,480円 雜費 110円)

## 子ども支援事業 (該当事業なし)

## 学校・外国人・子ども支援に関する普及啓発事業

### ⑧教育相談

<b>【2022年事業目標】</b> 相談事業を通して、ニーズの把握と必要な事業の展開の仕方を検討する。	
<b>【事業総括】</b> 学校・教師・行政・子ども・保護者・外国人当事者・支援団体等の各種相談に応じることを目的としているが、2021年度同様に新規相談はなかった。そのため、活動内容としては「すたんどばいみー基金」から引き継いだ相談業務、多言語若手通訳の発掘となった。	
担当者	●活動代表（理事）松永雅文 清水睦美 ○スタッフ 篠原弘美 林幹也
内容・日時・場所・ 参加者数	<p>①（2019年より継続）「すたんどばいみー基金」から移管された相談。該当者はS・E・R・Hの4名。それぞれ社会人として活動しているため、必要に応じた面談等を行った。</p> <p>②多言語若手通訳派遣事業          a 通訳登録3名（カンボジア語1名、スペイン語2名）</p>

	b　外部派遣は依頼がなく行わなかった。
収入金額	0円
支出金額	16,704円（諸謝金 16,704円）

## 学校・外国人・子ども支援に関する普及啓発事業

### ⑨普及啓発活動

#### 【2022年事業目標】

社会に対して当法人の理念と活動を紹介しながらその位置づけを明確にし、社会的に弱い立場にある人々に対する支援の重要性を普及・啓発していくこと。2022年度は特に女性に関わる問題に重点を置いた情報発信に留意する。

#### 【事業総括】

2021年度に引き続き当法人の理念と活動の紹介と社会的に弱い立場にある人たちへの支援の重要性を普及・啓発するために以下の活動を行った。

#### ①教育講演会（2022）の開催及び教育講演会（2023）の準備

##### 【2022年教育講演会】

実行委員会を立ち上げ、テーマについて協議した。コロナ禍を背景とした社会情勢を踏まえ、女性がとりわけ多くの困難を抱える状況に陥っていることについて考えることとし、下記講演会を開催した。COVID-19の感染状況も踏まえ、ハイブリッド開催とした。

##### 2022年教育講演会

児童虐待から家族・貧困・社会を考える 一コロナ禍で置かれた女性の位置－

講師：周燕飛氏（日本女子大学教授）

##### 【2023教育講演会】

2022年の共通活動テーマにそった各事業における活動内容を踏まえ、「女性の生きづらさ」に関心を寄せるメンバーが集まって「女性の生きづらさ」を語る場をオンラインにて立ち上げ、7回ほど議論を重ねてきた。その中で、家族の中で感じられる生きづらさや、母親役割の継承の仕方による違い、女性の生きづらさに対する男性の向き合い方など、依然として多くの観点や考えるべき課題が残っていることが明らかになった。そこで、メンバーの何人かが自ら経験してきた女性の生きづらさを改めて語り、それらに対して東京大学の本田由紀先生を講師として迎え、現在「女性」が置かれている立場について多角的にコメントをいただく計画を進めている。

②広報紙「Ed.ベンだより」はNo.49～54の計6号を発行した。

③ホームページは各事業内容の進行に合わせ、随時告知と報告を更新したほか、共通活動テーマ「女性の生きづらさを考える」のページと専用バナーを新設した。また、ページの新設に当たって、委託業者を変更した。アクセス数は5240件で、前年比1127減となった。

- ④2022年度パンフレット（三つ折り版）を作成・配布した。  
 ⑤15周年記念誌を作成し、会員に配布する準備を進めている。  
 ⑥特定のテーマに関する情報発信  
   a.脱・反原発に関する情報発信：HPを通して従来の情報を発信するにとどまつた。  
   b.女性に関する情報発信：HP上に共通活動テーマ「女性の生きづらさを考える」のためのページを新設し、このテーマに関わる書籍、講演会、広報紙を掲載・再掲するなどした。当初の予定よりもページの開設が大幅に遅れたため、ページの充実が十分にできなかつた。  
 ⑦資料・書籍の管理販売として、部室にて書籍を販売中。  
 ⑧他機関・他団体との関係構築として、10月にヒアリングの申し出が1件あり対応した。謝金として5000円を受領した。  
 ⑨渉外（研究者対応を含む）として、11月に取材申し込みが1件あり対応した。  
 ⑩会員に対してはメール配信と郵送による情報提供を継続している。広報誌の送付や事業に関する情報提供を迅速にできるよう努めた。

担当者	●活動代表（理事）角替弘規 ○スタッフ 池田喬 清水睦美
内容・日時・場所・参加者数	<p>①【2022年教育講演会】      2月19日（土）13:30～17:30      場所：富士見文化会館101号室・オンライン（Zoom）のハイブリッド開催、参加者25名</p> <p>②大和市を中心に関係団体に配布（2000部／回）    ③随時（担当者打ち合わせを原則月1回開催）    ④2022年度パンフレット配布 4月配布（2500部）    ⑥110部印刷予定    ⑦売上合計0円    ⑧1件：10月5日    ⑨1件：11月19日</p> <p style="text-align: right;">（のべ参加者数 名）</p>
収入金額	29,000円（寄付金）
支出金額	351,744円（賃借料27,940円、諸謝金33,411円、印刷製本費83,100円、通信運搬費111,178円、消耗品費70,210円、業務委託費23,100円、雑費2,805円）

## ⑩法人の事業円滑実施のための活動

### 【事業総括】

- ① ・総会 2022年2月19日（土）10：30～11：30 オンライン（Zoom）開催
  - ・活動報告会を年16回オンラインで開催し、審議・報告を行った。
  - ・事務局会議を年8回オンラインで開催し、事務局運営・事務所管理を行った。
  - ・年間計画を作成し、活動の全体予定を把握した。
- ② ・会計については、月1回の会計処理を行った。
  - ・年3回の会計締切日を設定し、予算の執行状況を確認した。
- ③ いちょう団地での活動について電話での問い合わせがあり、「すたんどうばいみー」を紹介した。

担当者	<p>●活動代表（理事）篠原弘美 武内敏子        ○スタッフ清水睦美 内藤順子 角替弘規 池田喬        （会計）篠原弘美 清水睦美 小西永里子</p>
内容・日時・場所・参加者数	<p>① 総会 2022年2月19日（土）10：30～11：30        オンライン（Zoom） 参加者 59名（正会員 82名）        活動報告会：16回（原則奇数月） オンライン（Zoom）        理事 15名        事務局会議：8回 オンライン（Zoom）</p> <p>② 会計処理：月1回 当法人事務所、部室        会計確認（締め）：年3回（1月、6月、12月）        当法人事務所</p> <p>③ 8月23日 当法人事務所 電話</p>
収入金額	588,536円（会費 552,000円、寄付 36,000円、雑収入 536円）
支出金額	291,069円（通信運搬費 105,654円、水道光熱費 42,924円、租税公課 18,000円、保険料 4,490円、諸会費 5,000円、雑費 115,000円）